



法隆寺のエンタシス

いっていいよ。

なんとも、私たちの夢を壊す過激な意見ですが、それは一体どういうことなのでしょう。

法隆寺の胴張り柱

法隆寺の中門や金堂などの柱は、中ほどが少しふくらんだ格好になっており、この形式の柱を日本では「胴張り柱」と呼んでいます。一方、古代ギリシア建築でも神殿などに「エ



法隆寺の中門

ンタシス」という形式の柱がみられ、荷重を支える支持材としての緊張感が与えられるとか、建築の外観に視覚的な安定をあたえるための工夫だとされていますが、法隆寺の胴張り柱と一見よく似た形をしています。

伊東忠太の「法隆寺建築論」

この両者の相似が、古代における東西交流の証拠だと最初に論じたのは、日本建築史学の創始者となった伊東忠太だとされています。明治26年(1893)に「法隆寺建築論」を発表した伊東は、その中で「中門建築の中に就て吾人か尤も奇とする所は其柱の形状に若くはなし、(中略)其輪廊は希臘の所謂エンタシスと名くる曲線より成り、(中略)東西交渉の結果となすに至りては余の會て信する所」と述べました。

伊東は、紀元前四世紀のアレクサnder大王による大東征によって、

ギリシアやペルシアの影響を受けて誕生したヘレニズムが、中国を通じて法隆寺へ伝わったと考えたのです。しかし、この説には「形が似ている」以上の根拠はなにもありませんでした。実際、「法隆寺建築論」発表前の学生時代の伊東は、法隆寺を訪れた際のことを日記に記していますが、「柱ニハ「エンタシス」アリ(中略)即ハチ知ルコレ印度ノ建築法ヲ直写セシモノニシテ西洋モ元来印度ヨリ建築ヲ輸入セシコトヲ」として、エンタシスはインドから西洋と日本の双方に伝わったと、「法隆寺建築論」で述べたギリシア伝来説とは異なる見解を示しています。

フェノロサの影響

伊東が、ヘレニズム伝来説に辿りついた背景には、奈良・東大寺の正倉院宝物に、西方の香りを嗅ぎ取った西洋人たちの存在がありました。

おわりに

そう、学会では語られなくなったギリシア伝来説ですが、大衆には受け入れられました。最近でこそWebでの情報流通のせいとか、疑問視する風潮が一般にも広まりつつありますが、近年までこの話は普通に語られていたのです。

これは千年以上も前に東西の交流があったという壮大な発想や、仏教寺院に中国でもインドでもなく、ギリシア伝来の柱が用いられているという意外性が、多くの人々のロマンをかきたてたからに他なりません。つまり、日本固有の様式というよりも西洋伝来という話の方が、面白いと受け入れられたから、法隆寺のエンタシスは生き続けたのでしょう。

(文：江口知秀)

鎖国が解けたばかりの明治の日本とは異なり、彼らの本国の博物館などでは、オリエント工芸が集められており、正倉院の宝物を目の当たりにした彼らが、これらとの類似を指摘したのは、ある意味必然的な結果でもあったのです。

なかでも日本美術を海外へ紹介したことで知られる、お雇い外人のアーネスト・フェノロサは、「法隆寺建築論」発表5年前に奈良で開催された講演において、「日本開明ノ遠因即チ文明東漸ノ原因ハ希臘ノ歴山帝ガ東征シテ文明ノ種子ヲ印度ニ遺シタルニ起リ、夫ヨリ支那高麗ヲ経テ日本ニ伝ヘタル」と、アレクサンダー大王によるヘレニズム伝来を説きました。この考えは広く知れ渡るようになり、伊東もこの説を支持していくことになるのです。

ナシヨナリズムへの傾倒

しかし、1910年代後半から学会におけるヘレニズムの日本東漸説は、衰弱していきます。理由の一つには、日本が西洋の列強と肩をならべる力を身につけたことも、あげられるかもしれません。自国賛美の風潮がただよいはじめ、法隆寺論でも日本固有の文化をみいだそうとする動きが高まっています。

伊東自身も昭和5年(1930)の「古代建築論」で、「法隆寺建築の

性質、様式、手法等を精査して見ると、(中略)其の精神に至っては全然日本的主義に立脚してゐる。従つて其の伽藍のプランも、其の形の現す表情も、將た又其の材料の選擇に於いても、其の構造の主義に於いても、決して支那朝鮮の模倣でなくして、我が日本の創意」とまで言い出すようになりました。

その一方で、エンタシスについては、「法隆寺建築に於ける柱のエンタシスの遠源は、慥に希臘および西亜にあると思ふ」としながらも、その根拠は「エンタシスの如き微妙なる曲線は藝術的感覚が極めて鋭敏であり、一点一線の差に由つて生ずる形の表情を感受する程の神経を有する國民にあらざれば、よくこれを作ることが出来ないものである。然るに漢民族は(中略)微妙なる技工に長じてをらぬ」として、中国人は芸術的センスが無いからエンタシスは作れない、よって中国ではなくギリシア伝来であるという、乱暴な意見を吐いて自説に固執しました。

むしろ伝説である

このように法隆寺のエンタシスは、形が似ているというだけの理由から生れた、根拠のない説でしたので、学会では影をひそめていくようになりました。もともと、千年以上も前



法隆寺中門の胴張り柱